

聖書：I サムエル 14：1～52

説教題：神が共におられたので

日時：2016年7月24日（夕拝）

前の13章でサウル王は主の命令を守らず、「あなたの王国は立たない」と宣言されてしまいました。そして預言者サムエルはサウルから去って行きました。そのままの状態のサウルは、どんな状況に陥ったのでしょうか。それが彼の息子ヨナタンとの対比の中で浮き彫りにされて行きます。

まず14章前半に記されているのはサウルの息子ヨナタンの成功です。彼は道具持ちの若者と二人でペリシテ人の先陣へ乗り込んで行きます。たった二人が上って行ったところで何になるかと思われるところです。相手は圧倒的力を誇るペリシテ人です。しかしヨナタンの信仰の言葉が6節にあります。「ヨナタンは、道具持ちの若者に言った。『さあ、あの割礼を受けていない者どもの先陣のところへ渡って行こう。たぶん、主がわれわれに味方してくださるであろう。大人数によるのであっても、小人数によるのであっても、主がお救いになるのに妨げとなるものは何もない。』」ペリシテ人の勢力は13章5節にあった通り、戦車3万、騎兵6千、それに海辺の砂のように多い民でした。それに対してこちらはたったの2人です。いくらなんでも、これっぽっちでは？と思われるところですが、ヨナタンは「たぶん」主が味方してくださるだろう！と言います。これは彼の信仰から出た言葉です。と同時にこの「たぶん」は、自分をわきまえた言葉でもあります。彼は主の主権的自由を認めています。そのわきまえを持ちつつ、主により頼んでいます。

二人は切り立った崖を上って行きます。ペリシテ人は思わぬところから敵が現れて、不意を突かれますが、相手はたったの二人。難なく始末できると思ったところ、何とヨナタンと道具持ちは20人を打ち殺します。その結果、非常な恐れがそこで生じました。この結果、20節にあるように相手は同士打ちを始め、自滅し始めます。また21～22節を見ると、隠れていたイスラエル人も勇気を得て出て来て、一気に形勢が逆転します。こうして23節にある通り、その日、主はイスラエルを救ってくださり、戦いはベテ・アベンへと移りました。これは前の章後半の記述からはとても信じられない展開です。

イスラエルは圧倒的優位を誇るペリシテ人を敗走させたのです。

さて、このヨナタンとの対比においてサウルはどうだったでしょうか。まず見るのは彼が主の働きから取り残されていることです。イスラエルへの祝福はヨナタンによって与えられています。サウルはそこに関係していません。本来はイスラエルの王として、彼こそがカギを握る存在であるはずなのに、サウルは騒ぎが起こってから対処し始めています。そしてこの後、私たちが見るのは、サウルがリーダーシップを発揮しようと試みるものの、うまく行かないということです。敬虔そうな言葉を持ってあれこれ立ち回りますが、全部空回りしてしまふ。

まず一つ目として、騒ぎが起こる中、サウルは 18 節で祭司アヒヤに「神の箱を持って来なさい」と言います。彼としては緊急事態発生の中で、何とか主の臨在を確かなものにしたいと思ったのでしょう。ところが騒ぎが大きくなると 19 節で祭司アヒヤに「もう手をしまいなさい」と言います。やろうと言ったのに、やっぱりやめた！と先の言葉を撤回します。中途半端です。

二つ目にサウルは 24 節で民に誓わせます。「夕方、私が敵に復讐するまで、食物を食べる者はのろわれる。」と。敬虔な誓いのようです。食べることを後回しにしてでも、敵を追いかけ、打ち負かすことに献身すべきであると。ところがこの結果、「イスラエル人はひどく苦しんだ」と 24 節の最初に書いてあります。23 節までのヨナタンの働きを通してせっかく「主はイスラエルを救い」という素晴らしい導きが語られたのに、サウルに主役がバトンタッチされた瞬間、イスラエル人がひどく苦しんでいる。何ということでしょう！続く記事を読むと、ヨナタンはこの父の命令を知らずに森の中で蜜を食べました。すると彼の目が輝きました。ところが民の一人が「あなたのお父さんは食べるな！」と堅く誓わせましたよ、と告げます。それを聞いてヨナタンは言います。29～30 節：「ヨナタンは言った。『父はこの国を悩ませている。ご覧。私の目はこんなに輝いている。この蜜を少し味見しただけで。もしも、きょう、民が見つけた、敵からの分捕り物を十分食べていたなら、今ごろは、もっと多くのペリシテ人を打ち殺していたであろうに。』」

三つ目はこの日の夕方のことです。イスラエル人は分捕り物に飛びかかり、羊、牛、若い牛を取って、その場でほふって食べました。サウルの誓いは「夕方まで」のものでしたから、この時間にはその誓いが解かれていたのでしょう。人々は空腹のあまり、血のままでそれを食べました。これは律法では禁じられていることでした。するとサウルは民に向かって「あなたがたは裏切った。」と言います。「血のまま食べて主に罪を犯してはならない」と。そして祭壇を築いて主に祈ります。ここではサウル一人が聖い人のようです。彼だけが主の側に立つ信仰的な人間のようです。しかし本当にそうなのでしょうか。

四つ目に食事が一段落すると 36 節でサウルは、今夜中に一気にけりをつけてしまおうと言います。ここに彼の熱意と勇壮さが示されています。それに対して祭司が「ここで、われわれは神の前に出ましょう。」と言います。そこでサウルは御心を伺ってみるものの、何の答えもありませんでした。人々の先頭に立って敬虔に振る舞い、熱心に導いているきよい彼なのに、なぜ神からの答えが何もないのか。その時、サウルは思いました。これは罪が我々の間にあるからだ！そこで彼は民の中で誰が罪を犯したのか、調べようとします。その際、たといそれが息子ヨナタンであっても必ず死ななければならぬと宣言します。くじのようなものを引くとサウルとヨナタンがまずとり分けられます。そしてもう一度御心を伺うと、何とヨナタンが取り分けられました。そこでサウルはヨナタンに「何をしたのか、私に告げなさい。」と問います。ヨナタンは少しばかりの蜜を食べたことを告白します。サウルは 44 節で言います。「神が幾重にも罰してくださいように。ヨナタン。おまえは必ず死ななければならぬ。」 たとい自分の子どもであっても誓いは果たされなければならぬ。わが子だからと言ってそれを撤回してはならぬ。いかにも信仰的に立派に振舞っているようなサウルの姿があります。

しかしこの 14 章のクライマックスとなるのが 45 節でしょう。民はサウルに一致してこう抗議します。「このような大勝利をイスラエルにもたらしたヨナタンが死ななければならぬのですか。絶対にそんなことはありません。主は生きておられます。あの方の髪の毛一本でも地に落ちてはなりません。神が共におられたので、あの方は、きょう、これをなされたのです。」 この民の猛抗議を受けて、サウルはあれだけ宣言してきた自分の誓いを引っ込めざるを得なくなります。王の面目丸つぶれです。しかも民は、神

が共におられたのはヨナタンの方だ！とこぞって証言しました。ということは、その彼を断罪しようとした自分は、神の側に立っていないということなのではないでしょうか。これだけ敬虔に、また熱心に振舞って来た自分なのに、神は私と共にいて下さっていないと考えなければならないのでしょうか。この 14 章が示しているのは、その通り！ということでしょう。

なぜ神はヨナタンと共におられて、サウルとは共におられなかったのでしょうか。その理由をはっきりしています。それは前の 13 章の結果ということですから。サウルは主の命令に従わず、自分の知恵や力で行動しました。そのため、主は彼から去っておられました。そんな状態でいくら表面的に敬虔に振舞っても何の意味もないし、物事が裏目裏目に出るのは当然の成り行きでしょう。いくら断食し、神聖な誓いを立てても、神はそれでだまされるお方ではありません。サウルはここで民が声をそろえて自分に反対し、神が共にいたのはヨナタンの方だと合唱する姿を見て、強烈なショックを覚えます。そのためでしょう。46 節で彼はペリシテ人を追撃する気力を失ってしまいます。せっかくのチャンスだったのに、サウルは神と自分との関係について大きな悩みに落とされたのです。彼は自分の真の霊的状态と向き合わされ、まずこの問題を解決するようと仕向けられなければならなかったのです。

最後の 47～52 節には、サウルの生涯についての短い要約があります。ここを読む時、私たちは当惑するかもしれません。なぜならここにサウルの業績が肯定的に描かれているからです。全体的に見て彼は勇気があり、軍事的に成功した王として記されています。しかしこのことを思う時、このようなこの世の「歴史的な記録」と「主の評価」とは必ずしも一致しないということを思われます。サウルは歴史的には功績を残したある意味で立派な王でした。しかしそのことは神の前でもそうであるということにはなりません。どちらがより大事なことでしょうか。私たちはここに世界の歴史的評価において成功した人でも、主との関係においては全くの失敗者であることがあり得ることを教えられるのです。そのことを心に留めて、この世の評価で良しとするのではなく、神の前で評価され、永遠に価値が残る生き方こそを目指して歩みたいと思うのです。

果たして私たちの毎日の生活は「神が伴っていて下さる」と言える生活でしょうか。

私たちも日々、自分なりに一生懸命頑張っているかもしれませんが。サウルのように色々試み、悪戦苦闘しているかもしれません。しかし神が共にいて下さらなければ、私たちのすることは空回りし、空しい結果に行き着くだけです。もし私たちが真に祝された人生を歩みたいと願うなら、大事なものは「神が共にいて下さる」という個人的関係を確立することでしょう。その関係を妨げ、破壊するものは何でしょうか。それは私たちの罪でしょう。イザヤ 59 章 1~2 節：「見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」 この状態にある人が、どんな工夫や人間的知恵を働かせても、うまく行かないのは当然でしょう。9 節：「それゆえ、公義は私たちから遠ざかり、義は私たちに追いつかない。私たちは光を待ち望んだが、見よ、やみ。輝きを待ち望んだが、暗やみの中を歩む。」 これはまさに今日の個所のサウルの姿ではないでしょうか。こういう私たちが、この状態から救われるための道は、自分のこのような状態を正直に神に告げて、赦しときよめを乞い求めることでしょう。20 節：「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中のそむきの罪を悔い改める者のところに来る。－主の御告げ－」 主は悔い改める者のところに来てくださり、再びともにいてくださるようになると言われていきます。これこそ私たちにとっての望みです。この道を進んだのがダビデであり、またペテロでした。神の祝福に生きた人々は、この悔い改めの道を進んだのです。

この道を進まず、ただそれまでと同じ路線を進んだサウルには、この章で祝福はありませんでした。いくら敬虔そうな振る舞いをし、勇壮なリーダーシップを発揮してみせたとしても、です。私たちも神と自分の関係をもう一度考えて「神が共にいてくださる」という関係を妨げているものがあるなら、それを告白し、悔い改めて、神との正しい関係に立ち返らせていただきたいと思います。その時に、私たちはヨナタンの世界に生きることができます。神が共にいてくださる祝福に歩むことができます。この「神が共に歩んでくださること」こそすべての祝福の基であるともう一度とらえ直して、そこから導かれる信仰の歩みの祝福へ導かれて行きたいと思えます。